

樋口真吉顕彰会会報

発行人
樋口新吉顕彰会
会長 安岡 明

11月10日四万十文化祭参加「歴史講演会」

「土佐勤皇党と幡多の志士」松岡司先生講演

高知県下でも有数の歴史家・松岡司先生をお迎えして歴史講演会が中央公民館でありました。幡多地域における幕末の志士たちの動向について触れながら、やはり庄巻は後半の樋口真吉についての、あたくも真吉を見てきたような素晴らしい講演でした。

■樋口真吉については彼の日記を中心に中村市史には上岡正五郎先生の資料があり、また桑原戒平編述の「樋口真吉先生」という貴重な文献も残っています。松岡司先生はそれらの全ての資料に目を通され、咀嚼され、自分の言葉で流ちょうに真吉を語ってくれました。とかく偉人を語る際には目立ったところのみが強調されがちですが、土佐藩の厳しい身分制度のなかで、身分が足軽であった真吉が30歳にしてやっとお目見えが叶い、容堂公の側近として江戸にも京都にも同行するようになったり、坂本龍馬の暗殺された現場検証にも立ち会い、日記にその記録も残し



松岡司先生の講演会風景

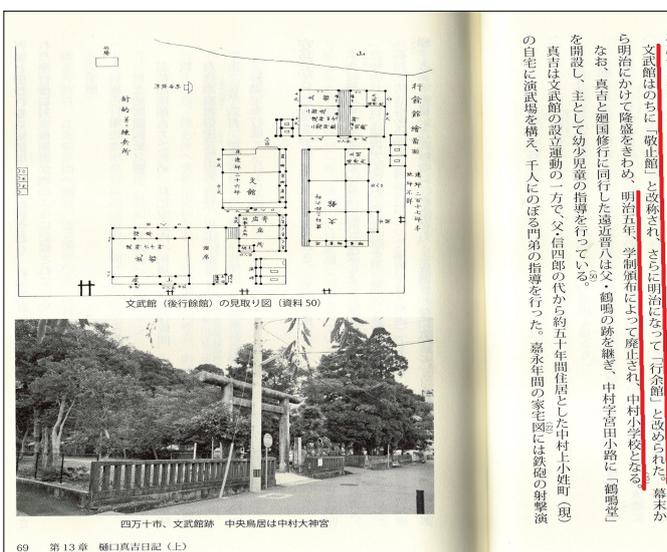
べきは、土佐藩が真吉の実力を認めざるを得ず、彼にしかるべき役職を与え、結果としてその役職に見合う身分に就けたという図式であって、身分が上がったから役職に就いたのではなかったのです。ある意味で真吉にとっ

文武館創設の建白書を提出

かと思いたくなる精選ぶりです。剣術のみならず槍術・砲術・学問・諸藩の動向・海外の動向についての知見等について並々ならない努力を重ね、西郷隆盛をはじめ諸藩の重役とも対話できる人材になりました。並の人材ではここまでの成長はできなかったと思います。

■真吉は31歳の時土佐藩に対し中村に学校を創設する必要があるという建白書を出し、今年後に再度提言しました。そのお陰で最初の建白から10年後に、今の中村大神宮の場所に文武館が創られました。この文武館が明治になって学制改革の後、中村小学校になったことが中村市史に書かれています。大石新陰流の免許皆伝になったのが33歳、その後一度九州へ出かけて腕を磨き、諸国を修行して見聞を広げてきたといえ、31歳の青年真吉

が、地元中村の青少年の教育に心を向け、学校の創設を藩庁に進言しているのは素晴らしいことです。そして安政二年真吉31歳の時、



ペリ来航の年、真吉の運命も変った!

歴史は残りませぬね。■樋口真吉日記には剣術と砲術を併せて千人の門人が居て、大盛況だったようです。真吉が長崎から江戸まで出かけて佐久間象山から砲術を学んできた年、土佐藩家老の福岡宮内

の訪問を受けています。そして彼の推挙を受けて、幡多奉行配下の真吉から土佐藩の真吉になったのです。ここから真吉の運命は大きく変わりました。この時真吉33歳でした。しかし容堂公のお目見え

文武館は「破産館」と改称され、さらに明治になって行楽館と改められた。幕末から明治にかけて隆盛をきわめ、明治五年、学制頒布によって廃止され、中村小学校となる。なお、真吉と堀修行に同行した遠近晋八は父・鶴鳴の跡を継ぎ、中村を田小村に「鶴鳴堂」を開設し、主として幼少児童の指導を行っている。真吉は文武館の設立運動の一方で、父信四郎の代から約五十年間住居として中村小姓町(現)の自宅に演武場を構え、千人にのぼる門弟の指導を行った。嘉永年間の家老図には鉄砲の射撃演

